

第27回日本保育保健学会 特別企画

2021年5月23日 15:00～17:00 参加費無料

先天性風疹症候群 当事者が語る

可児佳代 風疹をなくそうの会『hand in hand』会長

木村まち子 『聴こえない世界に生きて
— 沖縄風疹児55年間の軌跡』編者

司会 矢嶋茂裕（第27回日本保育保健学会会頭）からの紹介

★1987年、私は東京女子医大での研修を終え、国立療養所長良病院に赴任しました。着任早々、可児妙子さんの外来診療を引き継ぐことになりました。眼鏡をかけ、補聴器をつけ、強心剤を内服していましたが、一見元気な女の子です。

しかし心臓は思ったよりも悪く手術の時期を逸している可能性がありました。迷ったあげく、手術を勧め、確かに術後は成長がぐっと良くなりました。

私の転勤により年賀状だけのつながりになりましたが、元気で充実した学校生活がうかがえて安堵していました。しかし高校卒業を目前に妙子さんは18才の生涯を閉じました。ご両親は取り憑かれたように風疹撲滅に取り組み、日本全国を駆け回っています。



★1964年、日本中が東京オリンピックに熱狂していた頃、沖縄では風疹が大流行し400名以上の先天性風疹症候群児が生まれました。高校生になった彼らはろう学校から甲子園を目指し、『遙かなる甲子園』として漫画、映画になりました。

2000年、高校卒業後16年目を取材したドキュメンタリーがフジテレビで放送され、2019年には沖縄テレビで「とみ先生と風疹児たち」が放送されました。

2020年には木村まち子さんが『聴こえない世界に生きて— 沖縄風疹児55年間の軌跡』を出版されました。沖縄と言えば青い海の観光地と基地問題のイメージが強いですが、未だ風疹の後遺症と共に生きている方たちの存在を知っていただきたいです。